

名古屋城視察日記 令和7年1月20日

垂井駅 7時25分→岐阜駅 7時52分着→市内バス 7時57分→岐大病院 8時25分着→採血・採尿・CT検診・診断・会計 10時50分→市内バス 11時00分→岐阜駅 11時30分着 38分発→金山駅 12時05分着→地下鉄名城線 12時??発→名城公園駅 12時45分頃着→名古屋城まで徒歩5分→13時から天守閣見学・写真撮影約60分→徒歩→名城公園駅 14時18分発→金山駅 14時39分発→大垣駅乗り換え・垂井駅着 15時50分

本丸御殿 < 以下の文章は名古屋城公式ウェブサイトから >

[近世](#) | [名古屋城の歴史](#) | [名古屋城について](#) | [名古屋城公式ウェブサイト](#)



612年(慶長17)に建築が始まり、1615年(慶長20)に完成した本丸御殿。初代藩主・徳川義直の新居であり、尾張藩の政庁としても使われた。

1620年(元和6)、義直は二之丸御殿へ住まいと政庁を移し、本丸御殿は将軍が上洛とその帰途の際に宿泊する御成御殿となる。1633年(寛永10)、三代将軍・徳川家光の上洛に先立ち、増築が行われた。翌年、上洛殿(御成御殿)や湯殿書院、黒木書院などが完成し、さらに豪華なつくりとなった。内装には、日本絵画史上最大の画派である狩野派の障壁画や、華やかな飾金具が施された。

1945年(昭和20)、戦災により天守とともに本丸御殿も焼失してしまうが、襖絵や天井板絵などは取り外されており今も残っている。現存する1,049面のうち1,047面は重要文化財指定を受けている。

本丸御殿は、江戸時代の文献や戦前の写真、実測図などが残されており、それらをもとにした忠実な復元が2009年(平成21)から始まり、2018年(平成30)に完了しました。旧来の材料や工法を用い、寛永期の姿そのままの復元がなされている。

名古屋城の概要



関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康は、1603年(慶長8)に幕府を開く。

家康は1610年(慶長15)、加藤清正、福島正則など、西国・北国大名20家に命じ、公儀普請として名古屋城の築城を開始する。それは東海道の防衛を固めるとともに、諸大名への抑止効果も兼ねていた。

家康の子・義直が初代藩主として入り、盤石の体制を整えた名古屋城から大坂冬の陣・夏の陣へ出陣。その後、御三家筆頭・尾張徳川家の居城として、江戸260年にわたって栄えた。

名古屋城の築城がはじまった1610年(慶長15)は、1576年(天正4)の安土城築城によって確立されたと言われる近世城郭築城技術の完成期にあたる。そのため徳川の威信をかけた名古屋城には、当時の最新の技術が注ぎこまれた。

金鯱を頂く五層五階の天守は史上最大級で、最新形式の層塔型。狩野派の絵師による障壁画や豪華な飾金具などをしつらえた本丸御殿は、武家風書院造の代表的な建築とされている。

他の城郭の天守に匹敵する巨大な隅櫓、広大な二之丸庭園、高い石垣と深い堀、堅固で巧妙な縄張などを備え、近世城郭の完成形といえる。

尾張地方は名古屋城築城までは清須が中心でした。しかし、家康は尾張地方の拠点として名古屋

の地を選び、築城にあわせて清須から町ぐるみの引越し「清須越」を行う。

名古屋城の二之丸付近には中世に那古野城があったが、家康は、その縄張を継承するのではなく、自身の強い意志の下に、新たに名古屋城と基盤割の城下町をつくり上げた。それが現在の名古屋のまちづくりの原型となっている。

名古屋城では、尾張徳川家から陸軍省、宮内省、名古屋市と管理者が変わっても、重要な遺構や多様な資料の保存・記録が継続的に行われた。結果、築城時から各時代の改修・改変などの変遷を詳細にたどることができる。

現存する建造物や遺構には、往時の巧みな縄張や城郭の景観を、1,047面が重要文化財に指定される本丸御殿障壁画には、近世武家文化の一端を見ることができる。

江戸から明治にかけて編纂された名古屋城の百科事典『金城温古録(きんじょうおんころく)』、1932年(昭和7)から記録が始まった「昭和実測図」、「ガラス乾板(かんぱん)写真」などの史資料も豊富で、失われた天守や本丸御殿の詳細を今に伝える。



写真は美しい扇の勾配を描く天守の石垣

大名には石垣建造の担当箇所がそれぞれに割り振られた。天守台の石垣は、名手とされた加藤清正が自ら申し出て、3ヶ月とかからずに築き上げた。

室町時代からの前史も含め、名古屋城の歴史

- 1433年(永享5) この頃記録に那古野の館の存在が確認できる
- 1521~28年(大永年間) 駿河国守護・今川氏親、那古野城に子の竹王丸(氏豊)をおく
- 1538年(天文7)頃 織田信長の父・信秀が今川氏豊居城の那古野城を奪う
- 1555年(弘治元) 織田信長、清須城に移り、那古野城を叔父・信光に与える
- 1560年(永禄3) 織田信長、桶狭間の戦いに清須城から出陣、今川義元を破る
- 1600年(慶長5) 徳川家康の九男義直誕生 徳川家康、四男・忠吉を清須城主にする
- 1607年(慶長12) 忠吉病没後、徳川義直を清須城主にする
- 1609年(慶長14) 徳川家康、名古屋遷府を命令し清須から名古屋へ遷府を決定
徳川家康、名古屋城の築城を命じる
- 1610年(慶長15) 徳川義直の居城として名古屋城の築城を始める
本丸、二之丸、西之丸、御深井丸の石垣、完成 清須越、始まる
- 1612年(慶長17) 本丸御殿、作事始められる 天守が竣工する
- 1614年(慶長19) 徳川義直、大坂冬の陣へ出陣
- 1615年(慶長20/元和元) 本丸御殿、完成 徳川義直、春姫と結婚
・ 徳川義直、大坂夏の陣へ出陣
- 1617年(元和3) 二之丸御殿、完成
- 1619年(元和5) 御深井丸に西北隅櫓、完成か
- 1620年(元和6) 徳川義直、二之丸御殿へ移る
- 1633年(寛永10) 本丸御殿において上洛殿(御成書院)、御湯殿書院などの増築に着手
- 1634年(寛永11) 三代将軍・徳川家光上洛に際し上洛殿(御成書院)に宿泊
- 1696年(元禄9) 徳川宗春、名古屋に生まれる
- 1726年(享保11) 金鯨を修理
- 1730年(享保15) 金鯨を鋳直し(1回目)金網でおおう 徳川宗春、尾張7代藩主に(34歳)
- 1739年(元文4) 幕府、徳川宗春に「隠居謹慎」を命じる
- 1752年(宝暦2) 宝暦の大修理、宝暦5年完了
- 1827年(文政10) 金鯨を鋳直す(2回目)
- 1839年(天保10) 徳川宗春、没後75年に謹慎を解かれ名誉回復
- 1846年(弘化3) 金鯨を鋳直す(3回目)
- 1864年(元治元) 徳川慶勝、第1次征長総督として大坂城へ出陣
- 1867年(慶応3) 大政奉還 王政復古の大号令
- 1868年(慶応4/明治元) 鳥羽伏見の戦い(戊辰戦争勃発) 江戸城開城、新政府軍が入城
- 1869年(明治2) 版籍奉還で尾張藩を名古屋藩と改称、徳川義宜が初代知事に
- 1870年(明治3) 二代知事・徳川慶勝、名古屋城の取りこわしと金鯨の宮内省献納を發議
- 1871年(明治4) 廃藩置県
- 1872年(明治5) 名古屋城、陸軍省の所管に
- 1873年(明治6) 二之丸御殿が取り払われ兵舎を建設 金鯨、ウィーンの万国博覧会に出展
- 1879年(明治12) 中村重遠大佐らの進言を受け、名古屋城の保存を決定
- 1887年(明治20) 名古屋鎮台司令部庁舎、竣工(名古屋市最初の洋風建築)

- 1888年(明治21) 「名古屋鎮台」を第三師団と改称
- 1891年(明治24) 濃尾大地震により城内の建物の多くが被災
- 1893年(明治26) 本丸、西之丸が陸軍省から宮内省の所管に移り、名古屋離宮と改称
- 1921年(大正10) 西南隅櫓倒壊
- 1923年(大正12) 宮内省により西南隅櫓の修復
- 1930年(昭和5) 宮内省から名古屋市へ下賜 建物24棟が国宝(旧国宝)に指定される
- 1932年(昭和7) 榎の木、国の天然記念物・名古屋城が史跡に指定される
- 1942年(昭和17) 本丸御殿の障壁画の一部、国宝(旧国宝)に指定される
- 1945年(昭和20) 5月14日、名古屋大空襲で名古屋城焼失
- 1952年(昭和27) 3月29日、特別史跡「名古屋城跡」に指定される
- 1959年(昭和34) 名古屋城正門、再建
- 9月、伊勢湾台風、来襲 10月、名古屋城再建工事、竣工
- 1962年(昭和37) 名古屋城天守閣、博物館相当施設に登録される
- 1975年(昭和50) 二之丸大手二之門・旧二之丸東二之門、重要文化財に指定される
- 1984年(昭和59) 名古屋城博」で金鯪地上へ
- 2007年(平成19) 文化庁より特別史跡の現状変更許可(本丸御殿復元)
- 2009年(平成21) 本丸御殿復元工事着工(1月19日、起工式)
- 2013年(平成25) 本丸御殿玄関・表書院公開開始
- 2016年(平成28) 本丸御殿対面所・下御膳所公開開始
- 2018年(平成30) 本丸御殿復元工事完了、完成公開

彫刻欄間と上洛殿



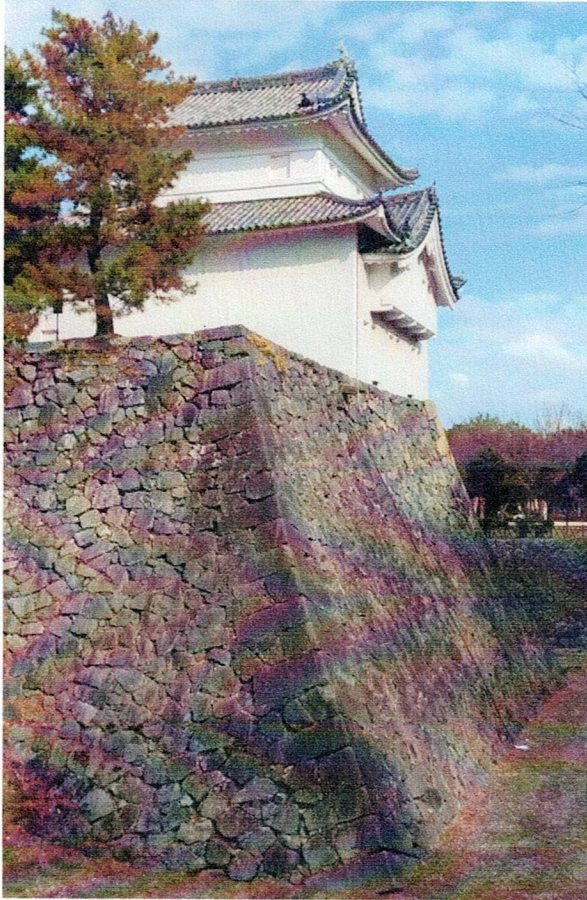
本丸御殿では、部屋の格式や用途によって天井や欄間、飾金具、障壁画などのつくりや意匠がさまざまに変化している。これは江戸時代初期に完成したといわれる武家風書院造という建築様式の特徴であり、その様式美には武家文化の粋が息づいている。

復元にあたっては、現代の名工たちが細部に至るまで技巧の限りを尽くした。天井に、欄間に、

襖の引き手に、襖絵に、受け継がれてきた匠の技と叡知の数々を見ることができる。

1634年(寛永11)、三代将軍家光が京都に向かう途中、名古屋城に宿泊した。それに先立ち増築されたのが、本丸御殿で最も絢爛豪華な上洛殿です。江戸時代には御成書院と呼ばれる。室内の装飾は細部まで贅の限りが尽くされ、当時33歳の狩野探幽(かのうたんゆう)によって描かれた「帝鑑図(ていかんず)」や「雪中梅竹鳥図(せっちゅうばいちくちょうず)」などは、傑作とされている。

西北櫓



御深井丸(おふけまる)の北西隅に位置し、1619年(元和5)頃に建造されたと考えられています。御深井丸戌亥隅櫓(おふけまるいぬいすみやぐら)とも呼ばれます。

外観三重、内部三階の構造で、大きさは東西約13.9m、南北約16.9m、高さ約16.2m。江戸時代から現存する三階櫓の中では、全国で2番目の大きさを誇ります。上下四方に屋根や庇(ひさし)を設けた入母屋造(いりもやづくり)、平瓦と丸瓦を組み合わせた本瓦葺き(ほんかわらぶき)で、北面と西面に敵を攻撃するための石落としが、各面には三角形の小型の屋根である千鳥破風(ちどりはふ)が設けられています。

西南櫓



名古屋城に創建時のまま現存する3つの隅櫓(すみやぐら)は、いずれも重要文化財に指定されています。西南隅櫓は、本丸の南西隅に位置し、1612年(慶長17)頃に建造されました。本丸未申隅櫓(ほんまるひつじさるすみやぐら)とも呼ばれます。

建物の規模は大きく、東西約11.8m、南北約13.5m、高さ約14.1m。一階に屋根を付けていないため、外から見ると二重櫓に見えますが、内部は三階櫓となっており、非常に珍しい形式です。

上下四方に屋根や庇(ひさし)を設けた入母屋造(いりもやづくり)、平瓦と丸瓦を組み合わせた本瓦葺き(ほんかわらぶき)で、二階西面と南面には、三角形の小型の屋根である千鳥破風(ちどりはふ)と敵を攻撃するための石落としが設けられています。

1921年(大正10)に石垣の崩落によって倒壊したため、当時の管理者だった宮内省により1923年(大正12)に再建修復されたことから、菊紋の鬼瓦、棟瓦が用いられています。

加藤清正石曳きの像



石垣づくりの名人とされた加藤清正は、名古屋城築城の際、最も重要な天守台の石垣を担当した。彫像は大石に乗り、石の運搬を指揮する清正。美しい扇の勾配を描く天守の石垣は、石垣構築技術が完成の域に達したことを示している。

名古屋城の石垣は、主に西国大名20家によって築かれました。

以前の天守閣の礎石



名古屋城の見学ができて、御城印集めも50を超えた。天守の建築様式である層塔型天守の代表的存在でもある名古屋城は加藤清正が造ったとは知らなかった。



特別史蹟

名古屋城

令和七年一月二十日

名古屋城見学記念写真と御城印-